

十段物語



第12回

“柔道一路”背負投の名人 小谷 澄之

本橋 端奈子

師範学校で柔道を学ぶ



小谷澄之十段

小谷澄之は明治36（1903）年8月3日、兵庫県但馬の農家に生まれた。尋常小学校の時分から角力が好きで、級友らを投げ飛ばして皆負かしていたという。兵庫県御影師範学校に入学した頃より柔道を始め、その面白さにのめり込んでいった。御影師範時代の柔道教師は、竹内流柔術の藤田軍蔵であった。上級生がとて厳しく、何かあればすぐにビンタが飛んでくるのは当たり前

で、登校前・昼休み・放課後と1日3回に亘る練習はかなり厳しいものだったという。しかし、小谷は好きな柔道が出来るということで一度も休まず稽古に励むのであった。自他共に「柔道の虫」と認めるほどの熱中ぶりであった。この頃、講道館への入門も果しているが、入門から3ヵ月後の大正11（1922）年1月には初段、同年10月には二段へと、異例の速さで昇段している様子から、小谷の強さと熱中ぶりが窺い知れよう。この年の7月には、京都武徳殿で行われた全国中等学校柔道優勝大会に小谷は主将として出場し、見事全国制覇を成し遂げ、深紅の優勝旗を御影へ持ち帰っている。

そして翌大正12（1923）年、御影師範学校を卒業するとともに上京、嘉納師範が校長を務めた東京高等師範学校²に入学した。20歳の春のことである。

東京高師に進学してからは、今までの試合本位の練習を改めて正しい技の指導を受け、姿勢も見違えるほど良くなっていった。また、日曜日毎に講道館へ行き、全国から集まった猛者と稽古出来るのが何よりの楽しみであったという。この頃の稽古について、小谷は次のように振り返っている。

中野（正三）先生等には面白いほど投げられ、ぶつかったものだ。（略）練習後にはぶつかり稽古と云って投げてもらったのだが、二、三十回もたたきつけられるものなら、足腰が抜けたようで、礼をしたあとは、はって控所に来たような時もあった。防禦姿勢で、悪い稽古をする者もいたが、それ等の人々は、あれは稽古が悪いからと云って、誰れも稽古相手になつてくれない。このような練習だった

から、自然に体捌きが、体得されたものと思う。先生から自然体で、臍下丹田に重心を置き、自由自在に、攻防の変化を勉強することが正しい練習方法であると教えられていた。⁴

こうして練習を積んでいく内、初めは考え考え技をかけていたのが、徐々に無意識下に技が出るようになっていったという。稽古の成果もあって、小谷は大正13（1924）年7月には三段、同年12月には早くも四段に昇段している。そして、大正14（1925）年秋に行われた第3回明治神宮体育大会において名譽ある優勝を果すのであった。

熊本・福岡対県柔道大会

小谷は上京して以来、講道館での紅白試合などで嘉納師範と対面はしているが、直接話を伺う機会は未だ無かった。その機会はなかなか訪れ

なかったが、昭和2（1927）年に至って高師の卒業を前に、彼は同級生らと揮毫を戴くために師範宅を訪ねている。その際の情景を小谷は次のように述懐している。

（初めて嘉納師範に）それこそ目の前でゆっくり御話を聞くことが出来た。我々四、五人で約束の時間に玄関で鐘を叩くと、女の方が出て来られて、「どうぞ二階へお上り下さい」とのこととで、二階に上ると大きな硯が用意してあった。ああこれだとそこで我々は一生懸命に墨をすった。やがてニコニコした童顔で、袴着用の和服姿で、我々の前に正坐され、しばらく話をされた後、筆をとられた。書は殆どが精力善用であったが、自他共栄も書かれた。途中私の顔を一寸御覧になり、何か希望があるか、と突然申しされたが皆だ

まっておると、その時あまり御書きにならない書句を私に書いて下さった。その一枚が「丹心照萬古」(であった。)⁵

「丹心 万古を照らす」—嘘偽りの無い真心より生ずる行いは、いつの世までも手本として在り続ける—この字句は、嘉納師範直筆の揮毫でもあまり見られず、現在数点が残るのみ珍しいものである。師範から特別な言葉を戴いた、と小谷には何か感じ入るものがあったのではないであらうか。小谷はこの言葉を胸に、高師卒業とともに熊本にある第五高等学校へ柔道助教授として赴任したのであった。

この頃、熊本県とそれに隣接する福岡県では、それぞれの県代表者による柔道団体戦である対県柔道大会が、大きな盛り上がりを見せていた。両県民の熱狂ぶりは凄まじいものがあり、県知事はじめ行政をも巻き込

んだ一大イベントであった。第1回、第2回とも熊本県は苦杯を嘗めており、昭和2(1927)年11月に行われた第3回大会での勝利は、全熊本県人の宿願となっていた。この大会に熊本軍大將として駆り出されたのが、10月に五段となったばかりの小谷である。先立って京都武徳殿で行われた選手強化合宿では、合宿所に毎日数十通の激励の手紙が届き、スタミナをつけるようにと数百個の卵、何樽もの酒・醬油、生きた鳥や牛などが争うように送られた⁷。この期待を一身に受けた小谷は、何としても勝たねばならない、と身が引き締まる思いを持ったことは想像に難くない。そして、嘉納師範臨席のもと福岡県春日原において1万5千人の大観衆の見守る中、第3回大会の火蓋は切られた。この大会の様子は以下に詳しい。

序盤戦は福岡の優位。前年殊勲

賞をもらった松隈も、牛島健三も、菅原も、島田も、調子がでないうちに時間切れ引き分けとなった。福岡はその後古賀、木原で三勝をあげ、熊本も負けじと中盤の山根、長宗我部が各一勝をつかんで4-2とにじり寄った。

そしてあらわれたのが牛島辰熊である。味方の不利に、彼は怒った。らんらんと目を光らせて、猛牛のように荒れくるう。盤石の寝技で、ソリの刃のように鋭い立ち技で、たちまち四人をなぎ倒し、五人目でやっと引き分ける大活躍だった。熊本6-4のリード。しかし、そのあとがまたいけなかった。上野、篠田、松前があいついで敗れ、副将宇土も三十貫の大男須藤金作の強引な大内刈りに屈した。

熊本は大將小谷を残すのみ。

福岡は三人。武道熊本の大きな期待をあつめて小谷は立った。(組んだ瞬間、)元力士だったという須藤の巨体がもんどり打って宙をとぶ。小谷得意の壮絶な一本背負いだ。だが、小谷の技が切れすぎたか、須藤は空を一回転してポンと立った。これでは一本にならない。二度目の背負いも同じ結果。そして三度目に放った小谷の閃光のような大技がみごと須藤を畳にはわせたのである。その間二十四分。福岡の副将森崎は、過去二度の大会で宇土を苦しめつづけた強豪だ。しかし、それも小谷の前には問題ではなかった。十八分で、あぎやかな内股がきまった。

こうして迎えた小谷―西。両軍大将同士の決戦は、一万五千の大観衆を熱狂の坩堝にたたきこんだ。小谷は徹底的に攻めま

くった。いまでいう「技あり」も何度かとって絶対の優勢。しかし当時の規則では勝負判定の資料にはならない。「どうしても勝つ」闘志の固まりとなって攻めつづける小谷の横顔に、わずかなあせりの色がみえた。電光のような右足払いがとぶ。―と、西は逃げながらそれを返した。必殺の力をこめた小谷の足は、無念にも空を切つてドタリと落ちたのである。土たん場まで追いつめながら、ついに熊本の宿願ならず。タイムアップ一分まえであった。

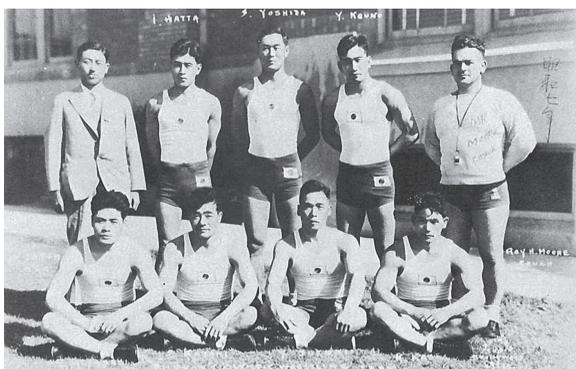
すでに1時間以上100kgの巨体と戦ってきた小谷の疲れと焦りを読んだ、西文雄の燕返が決まった瞬間であった。しかし西は、最後まで優勢に戦った小谷を「小谷さんこそ、当代ならば者のなき名人だ。試合内容はまったく私の負けだった」と語っ

ている。この名勝負によって、小谷の勇名は一躍全国に轟いたのであった。¹⁾

レスリングでオリンピック日本代表となる

昭和4(1929)年、26歳になった小谷は満州へ渡り、南満州鉄道株式会社に入社して満州各地で柔道の指導に当たっている。先輩である岡部平太を輔けて満州国体育課長・満洲国運動会柔道教授などを歴任し、それらの功が認められて昭和7(1932)年7月20日付で六段へと昇段を果すのであった。

同年、小谷は満鉄から欧米出張を命じられ、ハワイ、ロサンゼルス等を柔道指導で巡回している。ロサンゼルスには、レスリングの選手が柔道の練習に通っている道場があった。ある5月の晩、その選手とレスリングで試合をしないか、という話



ロサンゼルスオリンピックのレスリング日本代表
前列左から2番目が小谷

になり、高師でレスリングを少し練習したことのあった小谷は早速この申し出を受けることとなった。そして、5分もしないうちに、小谷は「フォール」してレスリング選手相手に快勝してしまったのである。小谷も驚いたが、周りは更に驚いた。

忽ちのうちに小谷と同行の吉田四一をオリンピックのレスリング競技に出場させよ、という気運となり、後援会までが立ち上がる事態となった。この年、昭和7（1932）年の夏は、奇しくも小谷の滞在するロサンゼルスで、将にオリンピックが開催されようとしていたのである。

早速本格的に特訓が始まった。そして当日まで、昼間はレスリング夜間は柔道という生活を続け、いざ本番を迎えることとなる。しかし、元々日本から出場を決めていた他のレスリング代表選手との兼ね合いもあり、小谷は自分の体重に見合うライトクラスではなく、2階級上のミドルクラスへの出場を余儀なくされてしまった。しかし、重い階級に配されても、小谷は奮闘し、レスリング日本選手団でただ一人四回戦まで進み、五位入賞の榮譽を勝ち取ったのであった。最後の試合でフォール

され負けを喫したスウェーデンの選手は、この段階で金メダルに輝いている。後に、レスリングの父と言われる八田一朗は、「小谷さんが若しあのとき、あなたのクラスのライト級に出場しておれば日本レスリング協会は創立早々金メダルを取っていた。実に残念なことをした」と語っている¹²⁾。

師範と共に欧州を歴訪

ロサンゼルスオリンピックには、嘉納師範もIOC委員として列席していた。大会終了後、カリフォルニアにおいて南加柔道有段者会主催による嘉納師範歓迎柔道大会が催され、小谷はその場で、ロス在住有段者相手に十五人掛を披露している。この時、師範は小谷の柔道を「自分の目指す理想形に近い」と大変誉めたという¹³⁾。これを伝え聞いた小谷も、この賞賛を非常な名譽として大

変嬉しかった、と後に書き記している。

嘉納師範にとつて、この時の小谷の印象が余程強かったのであろう。翌昭和8（1933）年、師範は約半年に及ぶ欧州旅行の随伴に、小谷を選んだ。昭和15（1940）年のオリンピック大会を東京へ誘致すべく、オーストリア・ウィーンで開かれるIOC委員会に出席するものであった。身長160cm余り、体重68kgの小兵でありながら正しい柔道で大兵を投げの小谷は、師範の目指すひとつの形であり、海外での普及活動に必要な存在であるとの抜擢である。

嘉納師範・小谷、そしてもう1人の随行員である鷹崎正見¹⁴の一行は、満州から陸路ヨーロッパを目指すこととなった。その様子を小谷は次のように書き残している。

満州里駅から国際列車に乗った。先生は一等車の一室、吾々



嘉納師範の相手を務める小谷

は二等車の一部屋を占有した。この部屋で約一週間の車中生活をするわけである。吾々の部屋は寢室、炊事場、食堂も兼ねるわけである。飯盒で御飯を炊くのだがなかなかうまく出来ない。石油コンロも調子がわるい。

お粥に化けてしまつて、ふっくらとした飯が出来ない、（しかも）列車内での火気使用は禁止らしい。食事を用意する時は、内から鍵をかけるのだが、食事の用意をしかけると、年寄りの車掌君、合かぎでドアを開け、無言で顔をヌーと出す。想像するに、火の用心をしろ、とでも云つておるようだ。その都度自分はニコット笑つて軽く頭をさげると、彼氏無言で立ち去る。先生も香りが、隣室に伝わると、ドアを開けて、どうだ御馳走ができたかと、ニコニコ顔で御出でになる。そこで三人が楽しい食事をしたものだ。料理は缶詰が主体だからあまり感心しないが、腹がへるとなんでもうまく感ずる。（略）一日二回の食事時間には、先生は目を細くして、にっこり笑つて吾々の部屋

にお出でになった。その時の笑顔が今でも目の前に浮ぶ。¹⁵

この長い鉄道の旅は、小谷のなかで、師範との印象深い思い出となった。

師範は、I O C委員会の傍ら、柔道の普及・宣伝のため精力的に各地を回った。小谷らはそれに付き随い、時には柔道の実演デモンストレーションなども披露している。

(嘉納師範) 講演の時の相手役と、各地の挑戦者の引きうけ役が、小軀の私で、巨人鷹崎の旦那には、おそれをなして誰れも挑戦して来ない。私に対しては、柔道原理の、精力を善用すれば小力といえども大力を制圧することのことだが、まさかこの小僧がこの俺を、というので挑戦して来る。試合といっても、一本投げたから、三十秒抑えたから勝ったではなく、審判員がおる

わけではなし、挑戦を受けければ、どちらかが、参ったと意思表示するか、絞め落すか、落とされるか、勝負のつくまでで、どんな技で攻めて来るか御互い不明で、それこそ真剣勝負だった。(略) ある人が) こんな真剣な、面白い試合は未だ嘗て見たことがない、と述懐しておったが、冗談じゃない。先生や鷹崎氏や北畠氏等は立派に勝ってくれと念じておられたと思うが、他の日本人はただ面白かったと思う。(略) ロンドンのある大きなホールで先生の講演会があり、そのあと例により私に有段者十名をならべて、拔勝負を見せた。出来るだけ違った技で、投げたり抑えたりしたが、十分もかからなかったので、英国に於ける柔道の父小泉軍治さんも、とてもよろこび、この巨人

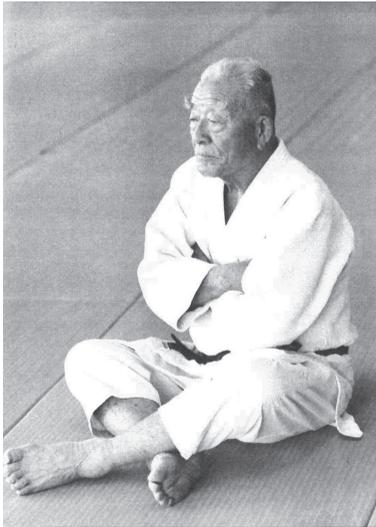
達を十分足らずで、どうして投げるのかちょっと考えられないが、事実目の前で実行された、すばらしい柔道の普及になりました。翌日の新聞には、試合の様態等大きく掲載されていた。¹⁶

師範が講演会で実演をする際は、大柄な鷹崎ではなく、必ず小谷が相手を務めた。平服の時でも、どんな場所でも師範から声がかかれば受身を取り、また師範もいつでも「皆さん御希望なら、私の弟子が御相手をいたします」というので、いつも気が抜けなかったという。小谷は身体が小さかったので、大兵の相手を軽く投げられる背負投を得意技としていた。こういった実演は大いに功を奏し、各地の新聞に大々的に取り上げられるなど、「柔道」の名は急速に広まっていったのであった。

講道館道場幹事長として

帰国後の昭和12（1937）年12月には七段、同20（1945）年5月には42歳にして八段と、小谷は順調に昇段を重ねている。終戦後は満州から引き揚げ、大阪に大阪柔道クラブを創設して約250名に指導をするなど¹⁷、戦後の柔道復興に力を尽した。昭和24（1949）年に至って講道館からの招聘により講道館渉外部の参与となつてからは、講道館道場幹事長・道場指導本部長・講道館道場最高顧問などを歴任し、後進の指導に邁進するのであった。

昭和37（1962）年には九段へと昇段を果し、この頃よりアメリカ・カナダ・ブラジルをはじめ、中南米・欧州各国で柔道指導に当たっている。そして、これらの



講道館大道場において毎日指導に務める

功績により、昭和59（1984）年4月27日の講道館創立百周年記念の場において、81歳の小谷は、当時ただ1人の十段となつたのである。小谷はこの榮譽を受けて、嘉納師範の恩に報いるため、より精進に努める決意を固めたという¹⁸。そしてその言葉通り、十段となつて後も毎日休むことなく道場に入り指導を続けたのであった。

小谷は平成3（1991）年10月9日、88歳でこの世を去つた。まさ

に柔道一路、柔道に尽した生涯であったといえるであらう。その国内外の柔道普及に尽した功績は多大であるとして、講道館葬をもって送られたのであった。

*引用文献は、現代漢字・仮名づかいに改めた。

《主要参考文献》

「修行時代の想い出」『柔道』第38巻第4号（昭和42年4月）
「故小谷澄之十段略年譜」『柔道』第62巻第12号（平成3年12月）

《その他典拠・註》

- 1 「修行時代の想い出」『柔道』第38巻第4号（昭和42年4月）
- 2 略称「東京高師」。現在の筑波大学の前身のひとつ
- 3 新潟県出身。昭和52年、講道館史上10人目の十段となる
- 4 前掲註1参照
- 5 「師範の想い出を語る」『柔道』第55巻第5号（昭和59年5月）
- 6 略称「五高」。現在の熊本大学の前身のひとつ

- 7 『宇土虎雄先生』宇土先生記念誌刊行会 (昭和51年)
 - 8 前掲註7参照
 - 9 前掲註7参照
 - 10 次の第4回大会には更なる補強をして臨んだ熊本勢であったが、福岡県庁・県警側が「これ以上対県試合を続けると、ますます両県民の対抗意識が最悪の事態を招く可能性がある」という理由で中止を宣言した。
 - 11 「想い出すまに」『柔道』第30巻第10号 (昭和34年10月)
 - 12 「故小谷澄之十段の講道館葬」『柔道』第62巻第12号 (平成3年12月)
 - 13 「先生と共に欧州の旅」『柔道』第39巻第3号 (昭和43年)
 - 14 後の講道館九段。嘉納師範の娘婿
前掲註13参照
 - 15 「海外の思い出」『柔道』第45巻第8号 (昭和49年8月)
 - 17 「館員通信」『柔道』第18巻第4号 (昭和22年10月)
 - 18 「講道館百周年記念昇段者及び新十段・九段のことば」『柔道』第55巻第6号 (昭和59年6月)
- 《写真典拠》
- 1 『柔道一路』小谷澄之著、ベースボール

- 2 マガジン社、1984年
同前
 - 3 講道館柔道資料館蔵
 - 4 『柔道100人』日本スポーツ出版社発行、1984年
-

訂正とお詫び

次のように誤りがありましたので訂正し、お詫び致します。

2011年10月号9頁上段 写真のキャプション

「講道館柔道十段物語 第11回栗原民雄」

誤 安部 英兒

正 阿部 英兒



**平成23年10月の寄贈図書
・資料の紹介**

図書

1. 『南郷三郎回想』南郷茂治、1986 (南郷茂隆氏)
 2. 『NHKテレビ トラッドジャパン (柔道の紹介など)』NHK、2011 (総務部)
 3. 『創立60周年記念誌』北区柔道会、2010 (関根正氏)
- 資料**
1. 「嘉納師範写真5枚、付属資料2枚」 (醍醐敏郎氏)
 2. 「山下義韶十段写真12枚、書簡1枚」 (近藤勝之氏)
 3. 「嘉納師範のコート」 (南郷茂隆氏)
 4. DVD 「日本海軍の歴史とともにー日本郵政歴史博物館と日本郵船氷川丸」 (日本郵政歴史博物館)